

# 女性語と教育に関する考察

大阪芸術大学 文芸学科 教授 龍本那津子

日本語には位相の一つとして、男女の言葉の性差がある。〔女性語〕とは、学術的には女性の使用することば全体をさすが、狭義には男性語と差異の著しい女性特有の語をいう。現在では、丁寧の意の接頭語「お」を種々の語に付けたものや、感動詞の「あら」「まあ」、終助詞の「わ」「だわ」「よ」「のよ」などが例として挙げられる。古くは、宮中・斎宮・尼門跡・遊里など、特殊な社会で発生した女性専用の語をいう。特に、室町時代ごろから見られる女房詞、江戸時代の遊女語が有名である。

近年、言葉の性差は少なくなりつつあると言われ、映画の字幕や翻訳などにおいても〔女性語〕の使用は減少傾向にある。新聞記事を調査すると、2000年代中頃までは女子の「汚いことば」「乱暴な言葉遣い」に関する記事が散見されるが、2020年現在の調査では、女性のことばに関する記事は、押しつけられた「女ことば」ではなく「自分らしいことば」の使用を求める内容に変わりつつある。

しかし、学生に調査したところ、「女の子だから」という理由で「乱暴なことば使い」を保護者などからたしなめられた経験を持つ女子学生は依然として多い。また、留学生への日本語指導をする際には、実際の運用の問題として〔男性語〕〔女性語〕の区別を教えることは欠かせない。中村桃子氏（関東学院大学）は「女性が実際に使うかどうかでなく、使うべしという規範こそが女ことばだ」と言う（『朝日新聞』2012年6月12日夕刊）。では、規範としての女ことば、「かくあるべし」という女性のことば使いはいかにして形成されたのか。また「規範」であるからには、そこには必ずなんらかの「教育」があるはずである。

本研究では、女性語を歴史的に俯瞰しつつ、「女性語」と「教育」がどのような関わりを持っているか考察したい。（ここで言う「教育」とは、近現代の学校教育のみならず、鎌倉時代以降の庭訓書や女訓書に見られる学校以外の場での教育も含めている。）

まず、日本語の性差を歴史的にたどってみたい。『万葉集』では、「君」は女性から男性に向けて使われ、その逆はなかったとされる。

## （例1）『万葉集』より・額田王と大海人皇子の贈答歌

茜草指 武良前野逝 標野行 野守者不見哉  
君之袖布流 （巻1・20 額田王）

（あかねさす 紫野行き 標野行き 野守は見ずや  
君が袖振る）

紫草能 尔保敝類妹乎 尔苦久有者 人孀故尔  
吾戀目八方 （巻1・21 大海人皇子）

（紫の にはへる妹を 憎くあらば 人妻故に  
我恋ひめやも）

平安時代は、漢語が男性の側に属する語彙であったことも日本語に性差が存在したことをうかがわせる。（例2）は紫式部が漢語を人前で使う清少納言を批判する記事である。

## （例2）『紫式部日記』（11世紀初）

清少納言こそ、したり顔にいみじうはべりける人。

さばかりさかしだち、真名書き散らしてはべるほど、よく見れば、まだいと足らぬこと多かり。…

『源氏物語』（「帚木」）では「博士家の娘（漢学に秀でた賢女という設定）」が、夫に漢語を多用して「せわしげ」（早口）に、しかも露骨な言い方で話すことから「むくつけし（＝薄気味悪い）」と酷評される場面がある。このように、平安時代の文献からは、言葉の性差や、「女性に期待されることば使い」を推測することはできるが、教育との関わりはまだ見られない。

女性のことばに対する「教育」が見え始めるのは中世である。（例3）は鎌倉時代中期の歌人阿仏尼が娘のために書いたとされる女訓書（女性向けの教訓書）『庭のをしへ』（『乳母のふみ』）の一部である。ここでは感情を直接ことばに出すことを戒めている。ただしこれは社交上の心得でもある。また、『乳母のさうし』（作者未詳・14世紀初頭 宮仕えの女性のために書かれた教訓書）では大きな口を開けて笑ったり、口角泡を飛ばしてしゃべったりすることをいさめている。これも女性に求められるたしなみであった。

## （例3）阿仏尼『庭のをしへ』（別名『乳母のふみ』）

また、うれしう御心にあふ事候とも、こと葉に「うれしや。ありがたや。」などおほせごとあるまじく候。うきも、つらきも、うれしきも、御心に能おぼしめしわきて見え候はんぞ。…

女性専用の語彙が形成されるのは室町期以降である。当時の宮中に仕える女性すなわち女房たちの間で使用された〈女房詞〉は女性語の代表的なものである。

江戸時代になると、女房詞は宮中→公家→江戸の武家屋敷→富裕な町人層へと広がり、〈御所言葉〉〈女中言葉〉などと言われるようになった。女房詞の古い文献には『海人藻芥』（1420）、『大上臈御名之事』（1589）などがある。

江戸時代には、女性の使って好ましい女性語を集めた『女の詞』『女中詞』と名づける書が多数出たので、単語が急増した。その代表的なものが『女重宝記』（1692）である。女性の身につけるべき教養を説く書で、漢語の使用を戒めたり、やわらかな言葉の使用を奨励したりしている。このような女性のことば使いの「しつけ」を重視する考え方は、女性に対しての言語的制約を強めることとなる。式亭三馬の滑稽本『浮世風呂』（1869）は当時の女性の話言葉を知ることができる貴重な資料だが、その中には奉公先で「上品な言葉」で話さなければならないことに辟易している下働きの女性二人の会話がある。

江戸時代には出版文化が花開き、さまざまな知識が書物によって伝播していく中で、人々の間に「学びへの熱が高まっていった。1692年に上梓された『女重宝記』は好評を博し、時代に応じて改訂されながらも、ベストセラーとして版を重ねる。江戸時代の女性の「学ぶべき言葉」の教育において、こうした江戸時代の出版文化の影響も見逃すことはできないだろう。